ひとりぼっち

「ひとりぼっち」と聞いて、どのような人を想像するだろうか？　部屋の中で独(ひと)り過ごす人のことを想像するだろうか？　それとも、楽しげに話す集団に入れずにいる人を思い浮かべるだろうか？

居室訪問を続けていると、訪ねたお部屋に必ずしもお一人でいらっしゃるとは限らない。

小さなお子さんが、「わたしのおじいちゃんね…」と言いかけて、母親が制止する場面や、部屋にいらっしゃるご家族を気にされて、震災の話に触れないようにされる場面にも出会ってきた。

ある女性は、「こんなこと話しても、津波を体験してない人にはわからないわよね」と、ため息まじりにおっしゃった。

これらは、自分の気持ちにフタをしてしまい、気持ちのやり場に困ったうえで出てきた態度や声であったのだろう。

家族に囲まれ、あるいは会話を楽しむ集団の中にも、こうした態度や声が、多く見られる。孤独やひとりぼっちは、決して独りでいることのみを意味しない。

気持ちを分かち合える場所、共有できる場所がなければ、どれだけ多くの人に囲まれていたとしても、その人は「ひとりぼっち」と言えるだろう。

安心して気持ちを吐き出してもらえるような場所、弱音を吐いてもいい場所、その人の悲しみが、その人の悲しみのまま受け止めてもらえる場所、そういう場所を私たちは、ともに作っていきたいと思っている。

（安部智海）